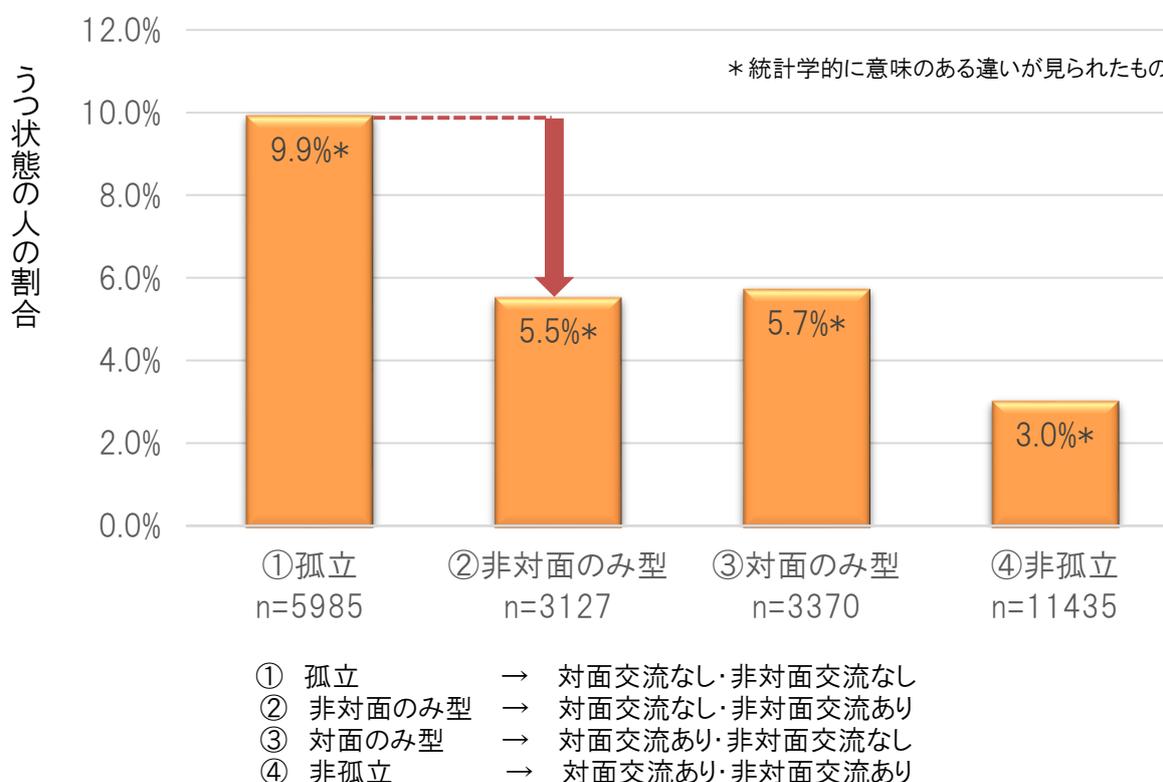


新型コロナ対策への示唆 電話・メールでの交流のみでも 健康リスクは軽減されるのか(第1報)

現在、新型コロナウイルス感染症が流行し、人との対面交流が控えられています。一方、社会的に孤立した高齢者は、抑うつ傾向が高いことが明らかになっています。そこで、感染リスクが抑えられる電話・メール・手紙などの非対面交流と対面交流の組み合わせを4群に分け、抑うつ傾向のあるうつ状態の人の割合との関連を分析しました。対象は23,917人の高齢者で、交流なしの基準は「週1回未満」としました。その結果、対面・非対面ともに交流のない人と比較すると、非対面交流のみある人は4.4%対面交流のみある人は4.2%それぞれうつ状態の人の割合が低くなることが確認されました。ここから、電話・メール・手紙などの非対面交流のみでも、対面交流と同等に抑うつとなるリスクが軽減される可能性が示唆されました。なお、前期高齢者・後期高齢者と年齢によって2群に分けた分析においても、結果はほぼ変わりませんでした。

お問合せ先: 日本福祉大学健康社会研究センター 福定正城 mt170283@n-fukushi.ac.jp
日本福祉大学社会福祉学部准教授 齊藤雅茂 masa-s@n-fukushi.ac.jp

JAGES2019 データを用い、23,917 名を対象とした分析



対面交流なし : 友人・知人、別居の家族や親戚と会う機会が週1回未満

非対面交流なし : 友人・知人、別居の家族や親戚と電話、メール、手紙などで連絡をとりあう機会が週1回未満

うつ状態 : 高齢者用うつ病尺度(GDS-15 スコア)が 10-15 点